



私はその研究を発展させるために Visiting Scientist として招聘されたと認識していたが、博士は具体的なテーマを与えたり、細かな指示をされる事はあまりなく、2週に1回程度研究に関する討論をしながら、2年後帰国する直前まで臨床研究を続けていた。このように自由に研究をさせていただきだけにプレッシャーも感じたが、自分のペースで臨床研究を進めることが出来、大変幸せであった。留学期間の2年間でデータをまとめることが出来なかったため、博士の許可を得てすべてのデータを持ち帰り、帰国後苦勞を重ねて数編の論文にまとめて、NIH から副学長として栄転されたテキサス大学へ送った。しかし、日の目をみたのは時間生物学の研究とは無縁の「食塩感受性高血圧」に関する論文 (Am J Med, 1978) だけであった。博士はテキサス大学在任中に不幸にも急逝されたため、帰国後長い時間を費やしてまとめた研究論文は、博士の死後他の共同研究者らによって、症例を追加したり修正加筆したりして発表されたようであるが、何の連絡もないままであった。博士亡き後のことであり、そのことに対してクレームをつける気力も失せてしまった。69歳での早すぎた博士の死は惜みてあまりあるものがある。

帰国後間もなくして、Halberg教授との日米共同時間疫学研究で私どもは時間生物学に関する研究を日本でも継続して行うようになった。臨床時間生物学あるいは時間医学には大変興味を持って取り組んだが、自分自身が専門家という大それた気持ちはなく、また時間生物学の研究を生涯の主要研究テーマとしてきたわけでもない。しかしながら、この学問との関連で行ってきた一連の日米共同研究あるいは九州大学における臨床研究はかなりの数にのぼっている。中でも代表的な仕事として、「日本人正常血圧者の24時間血圧変動の基準値作成」をあげることが出来る。この研究は、厚生省科学研究班の班長として全国の血圧変動研究に携わっている専門医17名と共同で行い、足かけ10年近くかけて原著・専門書などにまとめる事が出来た。莫大な量のデータを収集して下さった班員の方々やデータをまとめ解析に協力して下さった方々にこの場を借りて感謝の意を表したい。

Chronobiology の創始者といわれている Halberg 教授は、強烈かつ個性的な性格と学問に対する飽くなき情熱をもって、世界中の多くの研究者と共同研究を進めてこられた。彼はまた多くの造語を世に送り出したが、その中の一つで最もポピュラーな “circadian” rhythm という言葉は、Muller らが心筋梗塞の発症に24時間の周期性がみられることを、1989年に発表した一流専門誌の原著論文タイトルに使用したのがきっかけとなり、臨床医学にも広く使われるようになった。常識を超えていると言っても過言ではない彼の研究に対する情熱は、二度にわたる心臓バイパス手術を受けられたあとの現在もなお、ペースを落とさずに保ち続けておられるようである。八十路をはるかに過ぎても一向に衰えぬ学問に対する真摯な態度とそのエネルギーは、とても凡人の真似できるものではない。彼に対しては批判的な研究者も少なくないかもしれないが、私は今だに衰えぬ彼の研究に対するひた向きの姿勢には尊敬の念を持っている。

時間生物学は、遺伝子から宇宙まで壮大な広がりを持つ、学際的な学問として発展してきている。しかし、最終的に自然科学は「人類の幸せ」や「ヒトを取り巻く環境との共存」などを目指していると考えられる。オーダーメイド医療の時代を迎えようとしている現在、時間医学や時間治療学が臨床医学・医療の分野で益々重要視されてくるのは疑うべくもない。今後とも日本時間生物学会が、専門家だけではなく、時間医学や時間治療学に興味を持っている多くの臨床医をも包含して発展して行くことを、心から願って止まない。

(2003年10月7日)